

## 特定非営利活動法人チャイルドライン「もしもしキモチ」 設立趣旨書

チャイルドライン「もしもしキモチ」は、子どもに寄り添い、子どもの声に耳を傾け、自立をうながし、一人ひとりが自分らしく生きられる社会を実現することを目的とします。

いま様々な状況の中、誰にも言えない悩みを抱えて苦しんでいる子どもがたくさんいます。追いつめられて悲しい事件にいたってしまい「誰か悩みを聴き、しっかりと受け止める人がいたらよかったのに」と思われる例が後を絶ちません。

チャイルドライン「もしもしキモチ」は、このような子どもの現状に深く思いを寄せる、福岡県内のさまざまな分野を代表する人たちが呼びかけ人となり、ネットワークをひろげて、本年4月、設立準備会を発足させ、準備を進めてきました。

「チャイルドライン」は、子どもの立場に立って悩みや言いたいことをじっくりと聴き、受け止め、共感する電話。秘密は守る、名前は言わなくてよい、いやだったら切ってよいという、子どもの側に主導権がある、子ども専用電話です。

「チャイルドライン」は15年前、イギリスの民間団体がはじめた運動で、現在世界各国に広がり、とりまられています。日本では1998年「せたがやチャイルドライン」がはじめて実施、2000年1月「チャイルドライン支援センター」が発足、厚生労働省や文部科学省などのバックアップも受け急速に広がり、いま全国40ヶ所に開設されています。

「チャイルドライン」は、いじめや虐待、不登校、ひきこもりなど子どもをめぐる状況が深刻化し、出口の見えない閉塞状態にいる子どもたちに直接はたらきかけ、子どもが自らを表現することによって悩みをのりこえ、自立して生きていくことを支えようとするものです。

準備会は、「チャイルドライン」の精神を受け継ぎ、また日本の子どもたちへの心からのメッセージをこめて、ラインの名称を「もしもしキモチ」とし、実施に当たってのコンセプトを次のように決めました。

1. 子どもの声に耳を傾け、その気持ちを受け止め共感すること。 指示や解決策を示すのではなく子ども自身が解決の道筋を見いだすためのサポートをすること。
2. 受け止めた子どもたちの声を、社会に反映させていくこと。
3. 大人だけでなく、若者たちも受け手になって、支え合い、解決する力を養い、社会参画への道筋をつくること。
4. 既存の「子ども相談電話」などと協力し、情報を交換し合うキーステーションとしての機能をめざすこと。

ここに特定非営利活動法人チャイルドライン「もしもしキモチ」を設立し、子どもたちの声を全身で受け止め、その成長を支えながら、子どもたちが生き生きとした「子ども時代」をおくれるような、豊かな市民社会づくりをめざして活動をすすめていきます。

2001年10月7日 特定非営利活動法人チャイルドライン「もしもしキモチ」